

WHO 南東アジア地域事務所での インターン報告



兵庫県立大学大学院 看護学研究科 共同災害看護学専攻
災害看護グローバルリーダー養成プログラム(DNGL)

稲垣真梨奈

阪神淡路大震災の被災経験をきっかけに看護の道を志す。
奈良県立医科大学卒業後、京都大学医学部附属病院勤務、
大学非常勤講師を経て現在に至る。

はじめに

私と災害との出会いは、1995年の阪神淡路大震災でした。この被災体験をきっかけとして看護師となりました。そして現在、兵庫県立大学大学院看護学研究科共同災害看護学専攻「災害看護グローバルリーダー養成プログラム(Disaster Nursing Global Leader Program; DNGL)」に所属しています。本プログラムは、文部科学省博士課程教育リーディングプログラムに採択された国公立共同大学院(高知県立大学、兵庫県立大学、東京医科歯科大学、千葉大学、日本赤十字看護大学)であり、5年一貫制博士課程です。各大学が強みを生かし、互いに補完する独自のプログラムです。私が所属する兵庫県立大学は災害健康危機管理におけるWHO協力センターでもあります。在学中は国内外でのインターンシップが推奨されており、私は4回生の時に、インド・ニューデリーにある世界保健機関南東アジア地域事務局(WHO Regional Office for South-East Asia; WHO/SEARO)の健康危機管理部門(WHO Health Emergencies Programme; WHE)で経験しましたのでここに報告いたします。

WHO/SEAROの WHEについて

WHO/SEAROのメンバー国は、バングラデシュ、ブータン、朝鮮民主主義人民共和国、インド、インドネシア、モルディブ、ミャンマー、ネパール、スリランカ、タイ、東ティモールの11か国と

なっています。WHO/SEAROには5つのプログラムがあり、私が配属されたのは、その1つのWHEです。WHEには、さらに、5つのユニット Infectious Hazard Management、Country Health Emergency Preparedness & International Health Regulations(IHR)、Health Emergency Information & Risk Assessment、Management and Administration、Emergency Operationsが存在しています。

WHO/SEARO 地域における 災害について

災害疫学研究センター(Centre for Research on the Epidemiology of Disasters; CRED)(2019)のデータによると、2014年から2018年に発生した災害における死亡者数は、WHO/SEARO地域が最も多く、全体の30%を占めていました。過去には、2004年スマトラ島沖地震や2015年ネパール地震が発生しています。また、サイクロンや洪水も発生する地域でもあります。加えて、現在は、ロヒンギャ難民の問題を抱えています。

インターンの主な仕事・ 役割について

私は、WHEの中でも、Emergency Operationsのメンバーとなりました。現在発生しているロヒンギャ難民の支援に加え、今後の災害に備えてEmergency Medical Team等の訓練やパートナーシップ等の会議といった様々なタスクが、専門職スタッフ3名を中

心に割り振られ、コンサルタントや一般職スタッフと協力しながら業務を行っておりました。故に、インターンを受け入れるのがなかなか難しい部署でもあると言われていたので、本当に幸運だったと感じました。

私のインターンとしての主な役割は、Emergency Operationsに限らず、WHE全体においても、看護職が不在であるということから、Health Emergencyの看護担当でした。具体的な仕事として、まず初めに、南東アジア地域の危機対応における看護の役割についての文献検討を行いました。続いて、メンバー国の看護職に直接インタビューまたはアンケートによる調査を行いました。加えて、WHOの西太平洋地域事務所(WHO Regional Office for the Western Pacific; WPRO)とSEAROは、Asia Pacific Emergency and Disaster Nursing Network(APEDNN)を支援しており、これらのネットワークを中心として、南東アジアにおけるパートナーシップ強化に取り組みました。

学んだこと・ 身についたこと

私は、ナイチンゲールの活動に災害看護の原点があると考えています。なぜなら、彼女は、クリミア戦争という人為災害で傷病兵の収容環境の劣悪さに着目し、死亡率を低下させました。彼女は傷病者ケアに携わりながらその人の本来持っている生きる力を伸ばすとともに、データ分析し、グラフ化し、国を動かしました。

現在、各国ヘルスワーカーの50%は

看護職であるといわれており（WHO, 2019）、ひとたび災害が発生すれば、健康への被害を防ぐための看護職の支援活動は大きく期待されています。しかし、南東アジア地域の看護職は、依然として災害支援に対する知識や技術の不安を感じています（Usher et al., 2015）。また、インターン中の調査において、緊急対応における災害看護の文献は研究も含めて少ないという事実が浮き彫りになりました。そもそも、WHO/ SEARO のメンバー国の多くは、慢性的な看護職人材不足に見舞われており、人口 1,000 人あたりの看護職数は 3 人を下回っています（WHO, 2019）。これらのメンバー国において災害も考慮した平時からの看護教育、ヘルスシステム、パートナーシップ強化が重要であり、WHO の果たす役割の大きさを再確認しました。

感想、印象に残ったこと

インターン滞在中は、WHO/SEARO の Regional Director の 2 期目の就任式が開催され、全 11 メンバー国がテレビ越しに参加していました。また、別の日には、WHO 全スタッフ会議が開催され、テドロス事務局長ならびに各地域事務局

ヘルスエマージェンシーチームミーティング



長（WPRO からは葛西事務局長）が WHO リフォームについて話されていました。世界中至るところに存在する WHO のスタッフが、テレビ会議システムを活用して一堂に会し、チームとして一致団結する貴重な機会を拝見することができたことはとても印象的でした。

これから WHO インターンを希望する人へ一言

防災、強靱な保健システム、高齢社会等で世界をリードする日本からの貢献が大いに期待されていると感じました。アドバイスできるような立場ではありませんが、強いて言うなら、実務で使えるレベルにまで英語は向上しておいて損はありません。英語でレポートを書けるということはマストかと思います。また、頻

スタッフとタージマハルへ旅行



繁に略語や専門用語が使用されるので、事前に学習しておくとうよいでしょう。

おわりに

最後に、現地で私を受け入れてくださった WHO/ SEARO の WHE の皆様、WHO をはじめとした国連日本人スタッフ皆様、現地の関係者各位、ならびに、日本から快く送り出してくださった増野園恵教授を始めとした DNGL の教授陣、（公社）日本 WHO 協会の皆様、その他関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

参考文献

CRED. (2019) EM-DAT The Emergency Events Database. [Cited 5 Mar 2019.]. Available from URL: <https://www.emdat.be/database>

Usher, K. et al. (2015) Cross-sectional survey of the disaster preparedness of nurses across the Asia-Pacific region, *Nursing and Health Sciences*, 17,434-443

WHO. (2019) Global Health Observatory data repository: Density of nursing and midwifery personnel. [Cited 29 Mar 2019.]. Available from URL: https://www.who.int/gho/health_workforce/nursing_midwifery_density/en/